

JISS 国立スポーツ科学センター

Quarterly News Letter 季刊ニュースレター

Vol.12

JISS

Winter 2006



[特集]

第15回アジア競技大会

ドーハ2006

を振り返る

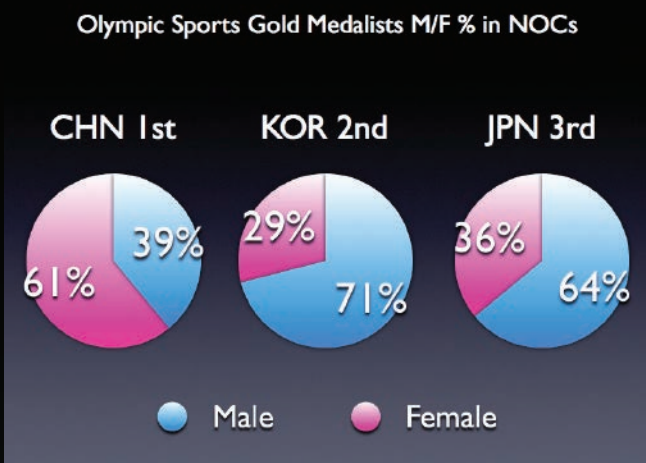


Fig.5

これは総メダル数でも同様であり、中国は出場選手の69%がメダリストである(Fig.4)。韓国が40%、日本が47%であることから見ても、少数精鋭ならぬ"多数精鋭"のチーム編成が行われていると言える。

このデータは、各国選手団がオリンピックに出場する選手をどの程度派遣したかを示すものである(Fig.2)。これを見ると、総合順位1位の中国は、選手団の87%がオリンピック実施競技への出場選手(※チームは1とカウント)であった。2位の韓国は85%、3位の日本は83%である。この点においては、各国間にそれほど大きな差は見られない。

北京大会に向けた中国の競技力向上戦略

12月15日、戦いを終えた中国選手団は総括記者会見に臨んだ。劉鵬団長(中国オリンピック委員会主席)は今回の結果について、「世界レベルに達しているものは少ない。この成績は北京五輪に直結しない。中国のレベルは停滞し、下がってきている(ドーハ15日時事)と厳しい評価を下した。

本大会において中国が国際総合競技大会に初めて参加する400人以上(選手総数の約6割)も



【特集】第15回アジア競技大会ドーハ2006を振り返る

このデータは、各国選手団がオリンピックに出場する選手をどの程度派遣したかを示すものである(Fig.2)。これを見ると、総合順位1位の中国は、選手団の87%がオリンピック実施競技への出場選手(※チームは1とカウント)であった。2位の韓国は85%、3位の日本は83%である。この点においては、各国間にそれほど大きな差は見られない。

次に示すのは、各国選手団のオリンピック実施競技出場選手におけるメダリストの割合である(Fig.3)。これによれば、中国は出場選手の36%がメダリストである。韓国は12%、日本は11%と

中国は自国開催であった1990年北京大会以降、アジアでは圧倒的な強さを誇っている。1994年広島大会では、金メダル獲得率を40%にまで下げた(前大会比20%減)ものの、その後また少しずつ獲得率を上昇させつつある。2002年釜山大会までは、1位と2位の金メダル獲得率の差は縮まりつつあったが、本大会においてはその差が一気に開いた。逆に2位から5位の差が小さくなっていることから考えると、6位以下のアジア諸国も含めたアジアでの戦いが厳しい様相を呈する中で、中国は安定した結果を残しているという、現

圧倒的な強さを誇る中国、激化するアジア諸国間の戦い

そのような状況のなか、アジア諸国は本大会をどのように位置つけて戦ったのか。まずは、その背景として、最近のアジア競技大会における各国の戦いぶりを振り返る。

近年、アジア地域における国際競技力向上への取り組みは、世界の潮流と同様に活発化している。特に中東アジアは潤沢な資金によるナショナルトレーニングセンターの整備やスポーツアカデミーでの競技者育成、外国人コーチや帰化選手の獲得等、今後脅威となる可能性を秘めた活動を積極的に展開している。

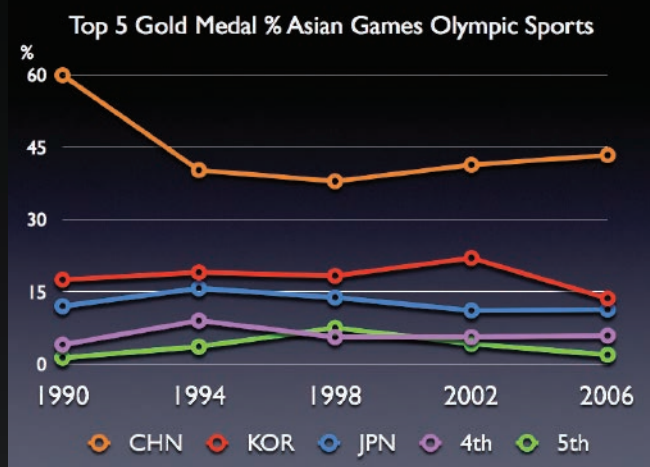


Fig.1

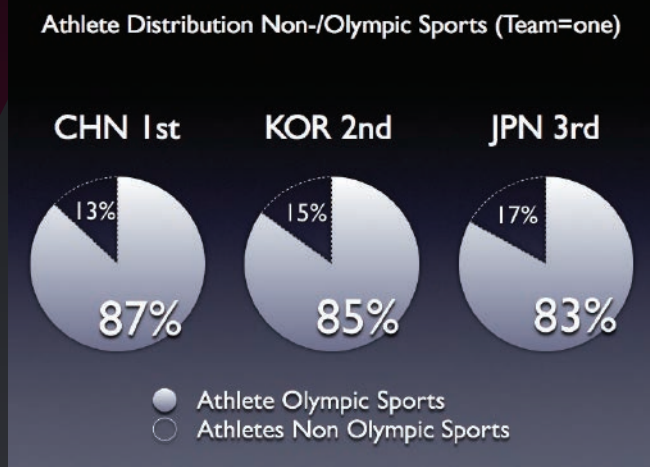


Fig.2

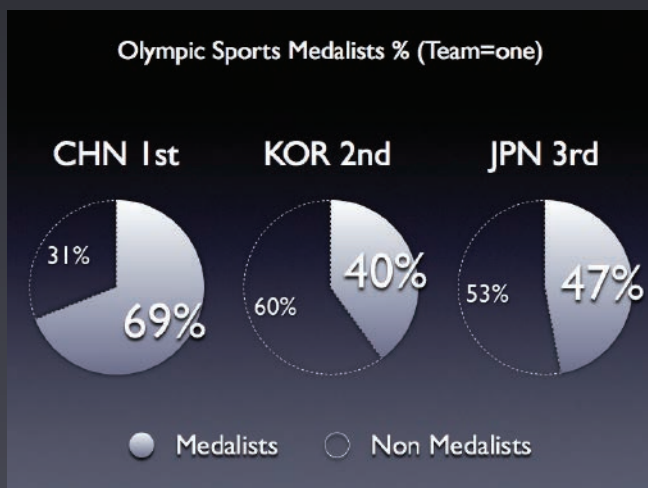


Fig.4

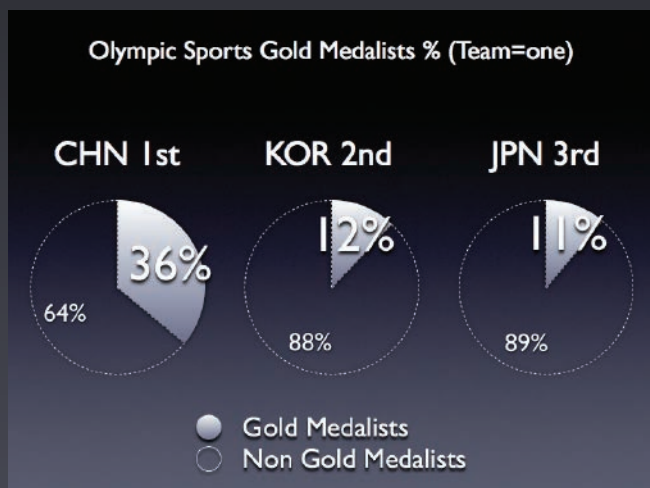
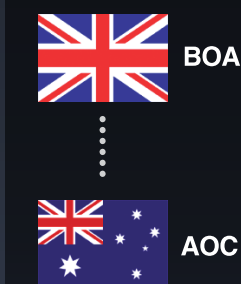


Fig.3

TIPS

国際競技力向上への戦略的合意=BOAとAOC



中国のケースのように、オリンピック競技大会に向けた選手団としての競技力向上のステップに、アジア競技大会をはじめとするオリンピック以外の国際総合競技大会を戦略的に位置づける動きは、世界でも起こっている。

BOA(英国オリンピック協会)とAOC(オーストラリア・オリンピック委員会)は2007年1月、組織間連携を拡大する合意を交わした。この合意に伴う具体的行動として、AOCは英国の若手選手に対して、オーストラリアン・ユース・オリンピック・フェスティバル(AYOF)の出場機会を提供することを発表した。この発表では、2007年大会だけでなく、2009年、2011年の大会にも招待する予定であることも明らかにしている。これによりBOAは、ロンドン大会に向けた計画的な競技力向上施策の一環として、英国の新星に対して国際総合競技大会の経験を与えることが出来るようになる。なおこの支援に対してBOAは、AOCがロンドンオリンピック時に行う事前キャンプにおいて、最適な競技場や宿泊施設を確保することを支援する約束を交わした。双方にとって有益かつ極めて現実的な合意の事例である。

ドーハから北京を見据えて 2008年への展望と課題

市原則之・JOC日本代表選手団総監督は大会前の記者会見で、JOC情報戦略部会の分析した金メダル獲得想定数「42〜58」を示し、「できるだけ58に近づきたい。前回大会の44を上回り、50に乗せたい」との目標を掲げた。結果、日本はその目標に到達し、総括記者会見においても林務団長は「当初の目標を達成したと考えている」と評価した。(Tbl.1)

本大会において、日本代表選手団は金メダル50個を獲得し、前大会に続いて総合3位の結果となった。また総メダル数で見ると、日本は韓国を5個上回り2位であった。いずれの数も、前回大会を上回る成績であり、アジア大会としての成果はあったと言える。

しかしながら、もう一つの重要な設定目標である、北京大会に向けたシミュレーション大会とし

Doha 2006 Medal Table 1 <All Sports>

Rank	NOC	G	S	B	Total	Rank by Total
1	CHN	165	88	63	316	1
2	KOR	58	53	82	193	3
3	JPN	50	71	77	198	2

Doha 2006 Medal Table 2 <Beijing 2008 Olympic Events Only>

Rank	NOC	G	S	B	Total	Rank by Total
1	CHN	119	74	46	239	1
2	KOR	44	32	56	132	3
3	JPN	39	48	65	152	2

Tbl.1

のドーハはどうであったのか。我々はその評価も併せて行なう必要がある。

今大会での面白い話題としては、北京大会での活躍が期待される若手選手の好調があった。競泳男子200m背泳ぎでは、入江陵介(16歳・近畿大附属高校)が1分58秒85の高校新記録で優勝。矢野友理江(18歳・大成学院大高校)は200mバタフライと800m自由形の両方で優勝し、「競泳女子で最も過酷と言われるこの2種目を制したのは大会史上初めて」と大々的に報じられた。またフェンシングでは、男子フルール個人決勝で大田雄貴(21歳・同志社大)が28年ぶりに金メダルを獲得した。準決勝で2005年世界選手権大会2位の張亮亮(中国)を破つての優勝だった。

だが日本には解決しなければならぬ課題もある。日本が目標達成に向けてTeam Japanとして苦しい戦いを強いられた原因の一つに、柔道での金メダルの取りこぼしがある。全階級でメダルを獲得しながらも、3個の金メダルを決勝戦で失った。釜山大会で獲得した7個の金メダルは今回、4個に減少した。

これは柔道だけの問題ではない。本大会において、日本には計80回の金メダルを獲得する機会(13日までの結果)があったが、そのうち勝利を収めたのは37回(46%)である。一方、中国は計169回の金メダル獲得機会を得、うち105回(62%)の勝利を手中にしている。当たり前のことではあるが、最後の戦いに勝たなければ金メダルを手にすることはできない。また、この戦いはアジアの頂点を決するものであり、少なくともこの山を越えなければ、北京に繋がる道はない。

結果として中国は、獲得した総メダルのうち半数を金メダルで占め、2008年に向けたシミュレーションとしての大会の幕を閉じた。

報告：阿部篤志(スポーツ情報研究部)

データ提供：東京Jプロジェクト2006ドーハ、トピマス・バイネルト(スポーツ情報研究部)

